

古代の「曼椒油」

『正倉院文書』等の古代の文字史料には、「胡麻油」(ゴマ)、「荏油」(エゴマ)、「麻子油」(アサ)、「閉美油」(イヌガヤ)、「海石榴油」(ツバキ)、「呉桃油」(クルミ)、「曼椒油」(イヌザンショウ)の7種類の植物油が登場します。古代において、植物油は食用のみならず、灯明や染織、塗装等、様々な局面で使われていました。

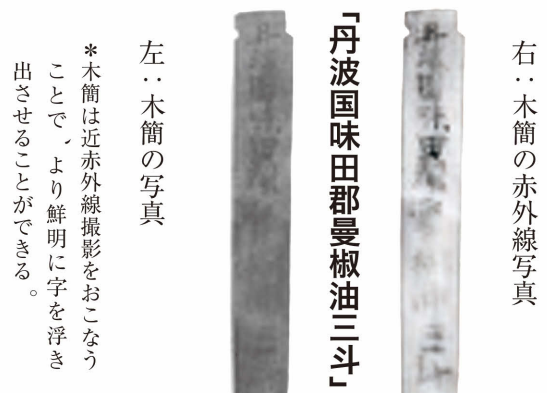
日本における植物油の起源に関しては、神功皇后の時に遠里小野で榛から油を搾ったのが初現だとする説があります。江戸時代の農業者である大蔵永常が記した『製油録』等にも書かれており、江戸時代には一般に流布していたのでしょうか。しかし、古代の文字史料には「榛油」は登場しません。

いっぽう、古代において、よく登場するのは、榛ではなく椒の油です。その一種であるイヌザンショウから搾った油は「曼椒油」と呼ばれ、灯明油等に使われていました。

平安時代の『類聚名義抄』には、「榛」の読み方に、「ハシバミ、ハシカミ」と記されており、両者が混同されていた可能性が考えられます。また、「榛」の字は「榛の木」と書いてハンノキとも読みます。ハンノキは古来、染料に用いられ、遠里小野は『万葉集』にも詠まれるほど、その染織で有名でした。

近世になって、遠里小野は菜種油の一大産地として名を馳せます。江戸時代の農学者達は、このイメージもあり、椒と榛を混同した可能性もあります。いずれにせよ、古代の人々は、様々な木の実等から油を得ていたことは確実で、その使い分け等について、今後も追究を重ねていきたいと思えます。

(都城発掘調査部 神野 恵)



平城京左京三条二坊SD4750から出土した木簡